
大きな柿の木の下で

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな柿の木の下で

【コード】

N0837H

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

少年と柿をめぐる哲学ちっくな物語。

村の真ん中には大きな柿の木が生えておった。

毎年秋になると甘い甘い柿の実を、木が橙に見えるほど生やすのである。

そんな木の下に坊主が一人、口を開けて、上を向いて座っておった。

「おい、ごんべ、またこんなところでさぼっちゃるのか」

友達の佐吉が冷やかしに来た。

「柿が食べたいのだが届かぬゆえ、落ちてくるのをまっているのじや」

「それなら、こうすりゃよかろうに」

佐吉は木に体当たりした。

柿がたくさん地面に落ちてつぶれた。

「木を揺らすのに一生懸命で柿を取れぬだろう。しかもいくつもつぶれてもつたいない。わしは一つだけ食べることができれば良いのだ」

「木に登ればいいだろう」

「わしの汚い足が木に触れたら良くない」

ふいに佐吉は石を柿の実にめがけて投げた。

しかし真上に投げたため、石が自分に当たりそうになった。

「欲張ると必ず仏から罰が下る。だからわしはこうしているのだ」

「じゃあ俺が木に登って柿を取ってきてしんぜよう」

「そうか。それなら欲張ったのはお前ということになり罰はお前に下るな。しかもお前の足はきれいだからそれなら大丈夫だ」

佐吉はちよつと腹が立ったが、足がきれいと言われたのでうれしくて、ちよちよいと木に登って柿を取った。

「ほらよ」

佐吉はごんべに柿を投げ渡した。

「待てよ。この柿を食べたら欲張ったのは私だと仏にばれてしまう」

「仏様は最初からお見通しだと思っぞ。柿1つくらい許してくださいよ」

「うーむーとうなって柿を持ったまま考えるごんべ。」

「その柿を食べろ。これは俺からの命令だ」

なるほど。そう言われて食べたのなら欲張りではなく義務だ。とごんべは思い、むしゃりと美味しそうに食べた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0837h/>

大きな柿の木の下で

2010年12月11日02時43分発行